

SCHOOL! YELL!! エール

Vol. 3

資格取得のために技術の習得を目指す！

鹿屋農業高校 機械工作部



▲技能検定の普通旋盤では、100分の1mmの精度とスピードが求められる。検定は前後期の年2回行われ、現在は前期試験に向けて取り組んでいる。

資格試験で特に難しいのは実技試験。普通旋盤でも機械検査でも精度とスピードが求められる。練習でうまくいかなければ部員同士で教え合うなど、声を掛け合いながら「全員合格」を目指して、確実性の向上に向けて日々練習を行っています。

機械工作部は令和3年に同好会からスタートし、翌年には部活動に昇格。主に機械に関する難関資格取得に向けて活動を行っている。現在はものづくりが好きな2・3年生20名で活動しています。



部長
ながの けいご
永野 圭吾 さん(3年生)

公民

地理

歴史

文化

文化財

まちづくり

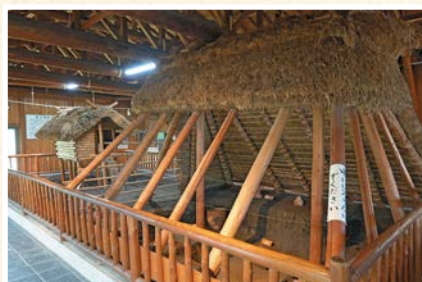
人物

その他

かのや風土記の中身をさらに深掘り

鹿屋街道

第3路「鹿屋市」に おける弥生時代



▲王子遺跡資料館(北田町)には、現地の竪穴住居等が移設復元され、弥生時代を想像できる出土品が展示されている。

弥生時代は水稲耕作が本格的に始まった時代とされ、鹿屋市では遺跡の遺物等から約2,500年程前に稲作が始まったと考えられています。弥生時代の稲作は、海岸砂丘の後背湿地から初期水田が定着したのが一般的ですが、鹿児島県ではシラス台地が侵食されて谷となった谷水田も多く利用されました。また、台地が多く平野の少ない大隅半島では、畑作を中心とした生活(陸稲)を行いつつ、水田稲作へと向かっていったと考えられています。

弥生時代中期になると、大隅半島でも大きなムラが見られるようになります。台地上に形成

された大規模な集落跡である「王子遺跡」では、竪穴住居跡が27軒、掘立柱建物跡が14棟発見されました。串良町細山田の田原迫ノ上遺跡でも竪穴住居跡が31軒、掘立柱建物跡が41棟で構成される集落が確認され、大型の住居と通常の住居、倉庫跡など共同体の存在が伺えます。また、本土最南端の環濠集落である串良町の西ノ丸遺跡では、標高約4mの沖積地に環濠を持つ集落が確認されており、稲作に適した場所へ集落も移ってきたことを示しています。



▲王子遺跡から出土した弥生土器は、カメ型土器(左)と壺型土器(右)があります。

いずれの遺跡でも大規模化が見られ、これまでの家族だけの単一集団でなく、いわゆる一族で集落「ムラ」を形成していることが分かります。このことから、本市においても弥生時代中期には「ムラ」が発生し、円熟して大規模な「ムラ」へと成長、そして他地域との交流など、幅広い文化を受け入れていたものと考えられています。